「中学校」を感じる時

今朝、授業巡視のために階段を上っていると、いつもと違う感覚になりました。例年卒業式後に味わう感覚ですが、今年度は卒業式前の今日味わいました。これもコロナの影響の一つかもしれません。

二階へ上がると、いつもと違う雰囲気にすぐ気づきました。人の気配が全くしないのです。三年教室が全て見渡せるよう廊下に出ると、四つの教室の出入り口だけが空しく開いています。今にも誰かが飛び出してきそうな気はしますが、人の声はもちろん、エアコンの室外機や空気清浄機の動作音も全く聞こえません。窓も空いていませんので、空気の動きもありません。

今日は県立高校一次選抜のために、三年生については臨時休業日でした。いつもいるはずの生徒たちがいない状態は、一足早く卒業式後の雰囲気を醸し出していました。巣立ちに向けて最終段階です。自分が飛び立つべき方向を、自分の力でつかみ取ろうと、今頃三年生は頑張っていることでしょう。

巣立ちは、彼らにとって喜ばしいことです。新しい世界に向かって飛び立つわけですので、祝福すべきことです。一抹の寂しさを感じながらも、立派に巣立っていく三年生を讃えたいような応援したいような、喜ばしい気持ちになります。今年度はコロナの影響で一次選抜が早くなった分、そうした感覚も一足早くやってきたようです。

しかし、別の感覚もあります。巣立っていく卒業生がいる一方で、巣立つために北中で学ぶ新入生がやがてやってきます。また、今後の巣立ちを迎える在校生たちが学年を一つずつ上げ、新しい成長を見せてくれます。こうしたわくわく感が生まれるのも今の時期です。「喜ばしさ」と「わくわく感」。この二つが入り混じる感覚が生まれる時期こそ、私が最も強く「中学校」を感じる時なのです。

草の戸も　住み替わる代ぞ　雛（ひな）の家

「奥の細道」の旅に出発するときに芭蕉が詠んだ句です。旅立つ前に、彼は住み慣れた家を人に譲りました。住人が代わったその家は、（自分が一人で住んでいた時とは一変して）雛人形を飾るようなにぎやかな家になりました。

これがこの句の意味です。

行きたくて行きたくて仕方がなかった旅に出かけられることに胸を躍らす芭蕉。その一方で、住人が代わったことによって新しい雰囲気が生まれたことをしみじみと喜ぶ芭蕉。「芭蕉も今の私と同じ心境だったのかなあ」などと大それたことを想像してしまった一日でした。

（三月三日　記）